TCAA・
Tokyo Contemporary Art Award 2021-2023

別紙

Tokyo Contemporary Art Award 2021-2023
【受賞者のプロフィール等】

志賀 理江子（しが りえこ）

1980年愛知県生まれ、宮城県在住。2008年に移住した同地で、その地の人々と出会いながら、人間社会と自然の関わり、死の想像力から生を思考すること、何代にも溯る記憶などを題材に制作。東日本大震災における社会機能喪失や、厳格な自然法則による体験は、その後、戦後日本のデジャヴュのような「復興」に圧倒されるという経験に結びつき、人間精神の根源を、さまざまな制作によって追及している。

近年の主な展覧会に、「コレクション展2 BLUE」（金沢21世紀美術館、2021）、「温情の地：震災から10年の東北」（Composite、メルボルン、オーストラリア、2021）、「Reborn-Art Festival 2021-22」（牡鹿半島（小積）、宮城、2021）、個展「志賀理江子 ヒューマン・スプリング」（東京都写真美術館、2019）、個展「カナリア」（Foam写真美術館、アムステルダム、2013）など。

《バイポーラー》よりスチル画像 2022

竹内 公太（たけうち こうた）

1982年兵庫県生まれ、福島県在住。パラレルな身体と憑依をテーマに、時間的・空間的隔たりを越えた活動を展開する。建築物、石碑、彫刻、公文書、郷土史家や目撃者のインタビューといった人々の記憶に触れながら、地図、ストリーミング映像、UAVカメラなどの多角的な視点で、メディアと人間との関係を探る。

近年の主な展覧会に、「MOTコレクション Journals 日々、記す」（東京都現代美術館、2021）、個展「Body is not Antibody」（SNOW Contemporary、東京、2020）、また指差し作業員*の代理人として「百年の編み手たち―流動する日本の近現代美術―」（東京都現代美術館、2019）、「ジャパノラマ 1970年以降の新しい日本のアート」（ポンピドゥ・センター・メッス、フランス、2017）など。

*2011年東京電力福島第一原発のライブカメラを指差した人物。竹内は彼の代理人として作品の編集、展示を代行している。

《地面のためいき》2022、インスタレーション　撮影：川越健太